

# アイルランド系移民にとっての南北戦争 ——回想録から読み解く「アイルランド人旅団」の記憶

徳田 勝一

## Summary

This paper analyzes three memoirs written by David P. Conyngham, William Corby and St. Clair A. Mulholland who joined the Irish Brigade which served in the Union Army in order to investigate how the Irish immigrants memorized the Civil War. The Irish Brigade was authorized in September 1861 thanks to the assistance of the Irish community in New York, and originally consisted of the 63rd, 69th and 88th New York regiments comprised predominantly of Irish immigrants. Under the command of Thomas F. Meagher, one of the Young Ireland in exile, the Irish Brigade fought many fierce battles, but virtually ceased to operate as a brigade after the battle of Fredericksburg, where the unit suffered fearsome casualties, because of having trouble in enlisting recruits.

Conyngham intended to leave behind him the “correct memories” of the Irish Brigade, which were characterized by Irish soldiers’ supreme loyalty to the Union and the oblivion of the Emancipation Proclamation and the Draft Riots. Corby added the solidarity among all the Christian soldiers to Conyngham’s “correct memories” because he was concerned about the revival of nativism caused by floods of new immigrants in the late 19th century and the decline of Liberals in the Catholic Church and intended to appeal for religious tolerance. Mulholland added the memory of the solidarity between born Americans and immigrants in the battlefields because he intended to reveal the role of immigrants in the American society in order to resist nativism.

## 序

「数知れぬ過去の出来事の中から、現在の想像力に基づいて特定の出来事を選択し呼び起こす行為、表象を媒介とした再構成の行為」である記憶<sup>1)</sup>は、個人的なものにしろ、集団的なものにしろ、当該個人や集団を取り巻く社会状況を反映して形成され、時代に応じて変容を遂げる。デイヴィッド・W・ブライトによれば、アフリカ系アメリカ人は南北戦争終結二十周年以後の数十年間、南北和解の時代状況を背景とした人種主義の再編・強化に抗して、南北戦争に関する複数の集団的記憶の系譜を育んだという。<sup>2)</sup>では、南北戦争

<sup>1)</sup> 小関隆「コメモレイションの文化史のために」小関隆他編『記憶のかたち——コメモレイションの文化史』（柏書房、1999年）、7頁。

<sup>2)</sup> David W. Blight, *Race and Reunion: The Civil War in American Memory* (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 2001), 300-1. 記憶研究の世界的な隆盛に伴い、米国でも伝統や公的記憶の構築性を意識する歴史家たちは、国民化や国民意識に関する議論の中で、国民の帰属意識を育む有力な装置たる公的記憶が紡ぎ出される過程に着目してきた。ブライトは、世紀転換期に国民統合のため

当時ドイツ系移民に次ぐ規模のエスニック集団を形成していたアイルランド系移民<sup>3)</sup>は、南北戦争の記憶をいかに育み、時代状況に応じていかに変容させていったのであろうか。

本稿では、上の問いに答える一助とすべく、ニューヨークのアイルランド人コミュニティの支援を得て編成された「アイルランド人旅団」に関する回想録を読み解き、考察を加える。「アイルランド人旅団」は、1861年の秋にニューヨークの三つのアイルランド人連隊（第63・69・88連隊）で発足した。<sup>4)</sup>アイルランド人連隊とは、エスニシティを軸として召集されたエスニック連隊のうち、アイルランド系移民を中心としたものを言う。連邦軍下のアイルランド人連隊が召集された経緯は次の通りである。1861年4月に南北戦争が勃発した際、わずか1万6千の陸軍正規兵しか有していなかった連邦政府は、戦時体制の構築を急ぐべく、1795年の法に基づき、90日期限の州志願兵7万5千を召集して連邦軍の下に置くことを宣言した。5月には3年期限の4万2千の志願兵と2万3千の正規兵が追加召集され、7月には議会が3年期限の志願兵100万の追加召集を認可した。募兵活動は、連邦陸軍編成の基礎単位である連隊（兵力50～100人の中隊10個から成る）毎に行われた。正規兵以外の連隊は、戦争省が州に割り当てた数に応じて州知事の裁量でその召集の認可と人員の募集・配置が行われ、通常、所属集団（地域・エスニシティ・団体・組織など）を同じくする人々によって構成された。<sup>5)</sup>1860年当時の米国人口の約13%に当たる400万人強は外国生まれの人々によって占められており、そのうちの約100万人はアイルランド出身であった。在米のエスニック集団がこぞって連隊の召集に動く中、アイルランド人連隊の召集と募兵活動も積極的に進められ、「アイリッシュ」の名を冠した連隊は全体で38にも及んだ。アイルランド系移民で軍役に就いた者は、第一世代だけでも14万人以上に上るため、アイルランド人連隊への入隊者数はそのうちの一部でしかない

---

の南北和解を演出する公的記憶が形成されていく過程を明らかにしている。それは、南北の再団結に必要な兄弟愛が南北の軍人（白人男性）による戦場での武勇の競い合いの中で生じたことに、南北戦争の意義を求める記憶であった。これに抗してアフリカ系アメリカ人が育んだ記憶は、南北戦争は黒人の解放によってアメリカを再生させた第二のアメリカ革命だとするものであった。南北戦争の記憶研究については、他に次の文献を参照。John Bodnar, *Remaking America: Public Memory, Commemoration, and Patriotism in the Twentieth Century* (Princeton: Princeton University Press, 1992); G. Kurt Piehler, *Remembering War the American Way* (Washington, D.C.: Smithsonian Books, 1995); Cecilia Elizabeth O'Leary, *To Die For: The Paradox of American Patriotism* (Princeton: Princeton University Press, 1998); Alice Fahs and Joan Wagh eds., *The Memory of The Civil War in American Culture* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2004); John R. Neff, *Honoring the Civil War Dead: Commemoration and the Problem of Reconciliation* (Lawrence: University Press of Kansas, 2005).

<sup>3)</sup>アイルランド系移民には、①18世紀以来アルスター地方から米国に渡った人々の子孫で、プロテスタント系の「スコッチ・アイリッシュ」と呼ばれる人々と、②1830年代以来数において①を凌駕したカトリック系の人々とがいるが、本稿においてアイルランド系移民という場合、主として②の中でも1840年代後半の「ジャガイモ飢饉」を契機に米国に大量流入した移民の第一世代と第二世代を想定している。

<sup>4)</sup>半島作戦の際に非エスニック連隊である第29マサチューセッツ連隊が編入されたが、1862年秋に第28連隊マサチューセッツ連隊と交代し、新たに第116ペンシルヴェニア連隊が加わった。

<sup>5)</sup>James M. McPherson, *Battle Cry of Freedom: The Civil War Era* (New York: Oxford University Press, 1988), 312-13, 322.

が、彼らの連邦軍への貢献はアイルランド系移民全体の連邦への忠誠を象徴するものとみなされた。<sup>6)</sup>

市井の軍事史愛好家からは注目され、その勇名が一般にも知られる「アイルランド人旅団」であるが、アカデミックな南北戦争の記憶研究の文脈において取り上げられたことはほとんどない。上述のブライトは、有名な黒人連隊である第54マサチューセッツ連隊の記憶がアフリカ系アメリカ人のアイデンティティの形成にいかに関与されたかを明らかにしているが、他のエスニック連隊には言及していない。ブライトの研究と並んで南北戦争の記憶研究の基本書の一つと目されるセシリア・E・オリアリーの研究では、「アイルランド人旅団」への言及が見られるのは二箇所のみであり、南北戦争時、ローカルな枠を超えて連邦護持のもとに結集し、「愛国心の意味を打ち出す工程」に寄与したものの、結局はアメリカ人になれるという期待を裏切られてしまったマイノリティ集団の事例として取り上げられているに過ぎない。<sup>7)</sup> フレデリクスバーグの戦いにおける「アイルランド人旅団」の武勇の神話化過程に焦点を当てたクレイグ・A・ウォレンの論文<sup>8)</sup>は、神話化の要因を探ることに主眼を置いたもので、「アイルランド人旅団」の記憶がアイルランド系移民を取り巻く時代状況に応じて変容していったという視点を欠いている。筆者の知る限り、「アイルランド人旅団」に限らず、黒人連隊以外のエスニック連隊の記憶に関する本格的な研究はなされていない。

本稿で読み解く回想録は、デイヴィッド・P・カニングムの『アイルランド人旅団とその軍事行動』(1867年)、ウィリアム・コービーの『従軍司祭生活の回想』(1894年)、セント・クレア・A・マルホルランドの『反逆戦争下の第116ペンシルヴェニア連隊の歴史』(1903年)の三冊である。<sup>9)</sup> これらを取り上げた理由は、著者のいずれもが「アイルランド人旅団」に従軍した経験を持ち、アイルランド人コミュニティに対する影響力を有する名士であったこと、さらに出版に際しては「アイルランド人旅団」に関する記憶を後世に伝えたいという明確な意図を持っていたことである。本稿により、アイルランド人連隊の記憶がアイルランド系アメリカ人のアイデンティティの形成過程で果たした役割を探る手がかりが得られるであろうと考える。本題に入る前に、「アイルランド人旅団」設立の経緯とその後の軌跡を明らかにしておこう。

<sup>6)</sup> Kevin Kenny, *The American Irish: A History* (New York: Pearson Education Inc., 2000), 123.

<sup>7)</sup> O'Leary, *To Die For*, 25, 33.

<sup>8)</sup> Craig A. Warren, "Oh, God, What a Pity!: The Irish Brigade at Fredericksburg and the Creation of Myth," *Civil War History* 47, no. 3 (September 2001).

<sup>9)</sup> 原題はDavid P. Conyngham, *The Irish Brigade and its Campaigns* (1867; reprint, 1994); William Corby, *Memoirs of Chaplain Life: Three Years with the Irish Brigade in the Army of the Potomac* (1894; reprint, 1994); St. Clair A. Mulholland, *The Story of the 116th Regiment, Pennsylvania Volunteers in the War of the Rebellion* (1903; reprint, 1996). いずれもフォーダム大学出版会から「南北戦争下のアイルランド人」と題して刊行された叢書にある。再建期から世紀転換期にかけて出版された書のリプリント版であるが、編者が附した書誌解説や図版・付録・索引以外はオリジナル版のままである。

## 1. ニューヨークのアイランド人コミュニティと「アイランド人旅団」

1840年代後半のジャガイモ飢饉により、210万人ものアイランド人が海外への移住を余儀なくされ、北米には180万人が押し寄せた。米国に流入したアイランド系移民の60%以上は、ニューヨーク・マサチューセッツ・ペンシルヴェニア・イリノイ四州の都市部に定住した。移民の大量流入によって急速に肥大した各地のアイランド人コミュニティは、民主党の政治マシーンを支える強力な基盤となった（例えば南北戦争前夜のニューヨーク市の場合、市政は人口80万中の約四分の一を占めたアイランド系移民によって支持された民主党タマニー派が牛耳っていた）。これは政治的ネイティヴィズムの高揚を招き、1850年代半ば、移民の選挙権の制限や公職からの排斥を掲げるノウ・ナッシング党に絶頂期をもたらした。この党自体は奴隷制を巡る内部対立の激化により急速に瓦解したが、その残党が新興の共和党に合流したため、1860年の大統領選で共和党が勝利した時、ノウ・ナッシング運動が猛威を振るった地方のアイランド人コミュニティでは、連邦政府への猜疑心と危機感が高まった。<sup>10)</sup>

南部との地理的・経済的な結びつきから、親南部で奴隷制支持の立場をとる人々が多かったニューヨークのアイランド人コミュニティでは、南部に対する融和的な雰囲気は支配的であった。これはサムター砦の陥落によって一変する。一時的にしる、コミュニティには連邦護持の熱狂が覆った。当時全米唯一の公式のアイランド人連隊であった第69ニューヨーク州兵連隊のほかに、10以上もの連隊がアイランド系移民の殺到で短期間のうちに必要人員を充たした。他に先立って出陣した第69連隊は、1861年7月の第一次ブルランの戦いの際、北軍が総崩れ状態になる中で踏み止まり、後々勇名が語り継がれることになる奮戦ぶりを見せたが、その一方で多数の死傷者や捕虜を出して壊滅状態に陥った。<sup>11)</sup>

帰還した第69連隊を立て直し、これを中核とした「アイランド人旅団」の設立に尽力したのは、トマス・F・ミーガーであった。彼は、アイランドの有力者の息子で青年アイランドの闘士であったが、1848年の蜂起直前に拘束されて死刑判決を受け、流刑地のタスマニア島を密かに脱出して米国に亡命したという経歴を持つ人物であった。アイランド人部隊が仏軍や西軍に奉仕したという18世紀の故事に倣う「アイランド人旅団」の構想は、当時3万3千部強の発行部数を誇っていた『アイリッシュ・アメリカン』紙がキャンペーンを張ったことで、9月までにはコミュニティ内でのコンセンサスを得た。実業家を中心に準備委員会が作られ、年末の出陣が目指された。<sup>12)</sup> カトリック教会も

<sup>10)</sup> Kenny, *American Irish*, 89-90, 116-17. 大量流入期のアイランド系移民とノウ・ナッシング運動については、他に次の文献を参照。Carl Wittke, *The Irish in America* (New York: Russell and Russell, 1970); Kerby A. Miller, *Emigrants and Exiles: Ireland and the Irish Exodus to North America* (New York: Oxford University Press, 1985); Tyler Anbinder, *Nativism and Slavery: The Northern Know Nothings and the Politics of the 1850s* (New York: Oxford University Press, 1992).

<sup>11)</sup> William L. Burton, *Melting Pot Soldiers: The Union's Ethnic Regiments* (Ames, IA: Iowa State University Press, 1988), 113-16.

<sup>12)</sup> *Irish-American*, June 20, July 13, September 14, 1861.

支援に動いた。ニューヨーク大司教ジョン・ヒューズは、「アイルランド人旅団」の兵士たちは従軍司祭の導きの下で信仰を實踐できるだろうとの期待を述べている。<sup>13)</sup> ミーガーは自らの名声に見合う栄達を米国社会で希求する野心家であり、幸運に恵まれたこともあって、「アイルランド人旅団」を率いる准将のポストを手にした。<sup>14)</sup>

「アイルランド人旅団」は1861年末に出陣し、翌年6月に血の洗礼を受けた。投入された戦闘の中で最も激戦だったのは、同年9月17日のアンティータムの戦いと12月13日のフレデリクスバーグの戦いである。前者においては、最前線の中央部分で戦い、約3000名のうち506名もの死傷者を出した。後者においては、メアリー高地の石壁の背後で待ち構えていた南軍の兵士によって文字通り粉碎され、約1300名のうち545名が死傷もしくは行方知れずとなった。この戦い以後、殲滅戦の凄惨さに衝撃を受けたコミュニティにおけるミーガーのイメージは悪化し、兵員補充が難航を極めたため、ミーガーは翌年5月に准将の職を辞した。同年7月のゲティスバーグの戦いでは、「アイルランド人旅団」は事実上降格され、歩兵大隊として戦った。1865年6月中旬に帰還した際には、700名ほどになっていたという。<sup>15)</sup>

「アイルランド人旅団」が旅団としての実質を失った背景には、コミュニティ内での反主流派の台頭がある。上述の通り、南北戦争前夜のニューヨークのアイルランド人コミュニティでは南部に共感を寄せる者が多かった。連邦護持の熱狂を背景に戦争政策を支持する勢力が主導権を握った後も、コミュニティ内では共和党政権に対する懐疑の念が燻り続けた。これが1863年1月の奴隷解放宣言を契機に表面化し、コミュニティを主戦派と和平派に分裂させた。奴隷解放宣言の発布と黒人連隊の召集によって戦争の大義は唾棄すべきものになってしまったとの認識はコミュニティ内で広く共有されたが、主戦派はコミュニティが戦争に協力し続けることで連邦の早期の勝利を実現し、戦後におけるアイルランド系移民の地位向上の道を開くべきだと主張した。これに対して、黒人解放のためにアイルランド人の血を流すのは許せないとして、早期の和平を主張する勢力が台頭したのである。<sup>16)</sup> コミュニティ指導層の対立に階級対立が加わり、事態を複雑化させた。南北戦争は軍需景気をもたらしたが、同時にインフレも加速させ、下層労働者の生活を直撃して彼らの憤懣を醸成した。これは、米国史上最も大規模で凄惨な都市暴動とされるニューヨーク市徴兵暴動が、1863年7月に勃発する要因をなした。徴兵暴動とは、同年3月に成立した米国史上初の「連邦徴兵法」中の「300ドル条項」(身代わりの雇用又は300ドルの支払いによって有産者は徴兵を免れ得るとした条項)が下層民の反感を買い、四日間にわ

<sup>13)</sup> *New York Times*, May 1, 1861.

<sup>14)</sup> ミーガーは熱烈なアイルランド民族主義者として知られていたが、フィーニアン(アイルランドの独立を武力闘争によって獲得し共和国を建国することを目的として1858年に創設された国際組織)とは一線を画していた。Rory T. Cornish, "An Irish Republican Abroad: Thomas Francis Meagher in the United States, 1852-65," in *Thomas Francis Meagher; The Making of an Irish American*, ed. John M. Hearne and Rory T. Cornish (Dublin: Irish Academic Press, 2006), 139-52.

<sup>15)</sup> Burton, *Melting Pot Soldiers*, 121-26.

<sup>16)</sup> Edward K. Spann, "Union Green: The Irish Community and the Civil War," in *The New York Irish*, ed. Ronald H. Bayor and Timothy J. Meagher (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1996), 203-5.



たる暴動に発展したものである。<sup>17)</sup> 暴動の各局面におけるアイルランド系移民の存在感が際立っていたため、アイルランド人コミュニティの世評は著しく貶められた。戦争継続を巡っては分裂したコミュニティであったが、1864年の大統領選では民主党候補のジョージ・B・マクレラン將軍を熱狂的に支持した。<sup>18)</sup>

## 2. デイヴィッド・P・カニンガム『アイルランド人旅団とその軍事行動』(1867年)

『アイルランド人旅団とその軍事行動』の著者カニンガムは、アイルランドの生まれで、青年アイルランドに身を投じた後、潜伏期間を経て1861年に渡米した。1862年末から翌年春まで参謀将校としてミーガーに仕えた後、『ニューヨーク・ヘラルド』紙の特派員に転じ、1883年に死去するまで、ニューヨークで新聞編集の仕事に携わりながら、アイルランドの歴史と文化に関する著作を数多く発表した。<sup>19)</sup>

著者が同書を執筆した意図は、「アイルランド人旅団の軍人たち、つまり帰化した国の大義やアイルランド民族の勇気と忠誠を担いながら倒れていった者たちの記憶に、敬意をもってこの書を捧ぐ」<sup>20)</sup>とした同書の献辞に示唆されており、序文で次のように明確化されている。

彼（アイルランド系軍人）は、自らが帰化した国の安全と繁栄とその栄えある憲法が危機に晒されていると感じた。それ故彼は、迫害されて故国から追放された時に彼を匿ってくれた旗と、彼を保護してくれた法と、彼を養うために慈愛に満ちた母の如く豊かな愛情を惜しみなく注いでくれた国を支えるために、進んで（南北の）仲違いに身を投じたのだ。従って、アイルランド系軍人は愛国者であって傭兵ではない。<sup>21)</sup>

私は報酬目当てではなく、我々がアメリカで獲得してきた栄えある軍事的記録を忘却から救い出すのを手助けしたいとの一念で本書を書いた。アメリカ軍における全てのアイルランド人連隊とアイルランド人旅団の歴史が書かれることを、それ故アイルランド人の歴史を書く未来のバンクロフトのために史料が保存されることを希望する。<sup>22)</sup>

このことから著者は、愛国者としての「アイルランド人旅団」の記憶が、自らの著書によって後世に残されることを期待していたことが伺われる。

同書の本文は、行軍や戦闘の場面を描いた部分と駐屯地での日常生活や祝祭の様を描

<sup>17)</sup> 徴兵暴動については、Iver Bernstein, *New York City Draft Riots: Their Significance for American Society and Politics in the Age of the Civil War* (New York; Cambridge University Press, 1982) を参照。

<sup>18)</sup> Spann, "Union Green," 205-7.

<sup>19)</sup> Lawrence Frederick Kohl, "Introduction: The Irish Brigade, Irish-America, and David Power Conyngham," to *The Irish Brigade and Its Campaigns*, by David P. Conyngham (New York: Fordham University Press, 1994), xviii-xxii.

<sup>20)</sup> Conyngham, *Irish Brigade*, 3.

<sup>21)</sup> *Ibid.*, 6.

<sup>22)</sup> *Ibid.*, 9-12.

いた部分からなっている。注目すべきは、①南北両軍の名将たちがアイルランド系軍人の勇猛果敢さに驚嘆したという逸話と、②星条旗と連隊旗が並立するイメージや連隊旗を死守する軍旗護衛兵にまつわる秘話が、繰り返し挿入されていることである。また、③華々しい戦闘の場面の後には、戦争の残酷さや悲惨さを語る件が続き、同胞殺しをテーマとする秘話がしばしば語られていることも看過できない。①からは、アイルランド系軍人の高い死傷率は名誉を尊ぶアイルランド人の民族性に由来し、アイルランド民族としての誇りを保持していたがゆえのことであって、当時噂されていたような軍上層部や政府首脳のネイティヴィスト体質に起因するものではないとする著者の意図が読み取れる。②に関しては、星条旗はアメリカ合衆国への忠誠心を、連隊旗はアイルランド民族としての誇りを象徴していると考えられる。アメリカ合衆国への忠誠心とアイルランド民族としての誇りは両立し得るものであるということを著者は印象づけたかったのであろう。③からは、アイルランド系軍人の苦難や悲劇の大きさを語ることによって、彼らのアメリカ合衆国に対する忠誠心は至高のものであったことを示そうとする著者の意図が読み取れる。これに最も合致するのが、親子や親友が南北両軍に分かれて戦場でまみえるという究極の同胞殺しの秘話だったと言えよう。さらに同書には全編を通じて、ミーガーの人物や武勲を称讃したり、彼の立場や見解を擁護したりする記述が随所に見られる。前節で述べた通り、ミーガーは和平派の標的となった人物である。同書にはミーガーの弁護という隠された意図があったのではないかと推測される。

同書は基本的には「アイルランド人旅団」の軌跡を年代順に追ったものであるが、単なる事実経過の羅列ではなく、記述には濃淡が見られる。突出して濃密なのはフレデリクスバーグの戦いに関する記述である。激戦として知られるゲティスバーグの戦いにはわずか7頁しか割かれていないのに対し、フレデリクスバーグの戦いでは18頁の長きにわたって「アイルランド人旅団」の武勇が繰り返し称揚されている。<sup>23)</sup> これは一体何に由来するのだろうか。第一に挙げるべきは死傷者数の多さであろう。死傷者数の多さこそ勇猛さの証しとする当時の価値基準<sup>24)</sup>に照らせば、「アイルランド人旅団」の勇姿を描く舞台としてこれ以上相応しいものは無かつたろうと推測される。だが、死傷者数だけではアンティータムの戦いも引けを取らない。実際、記述に割かれたスペースは両者ほぼ同じである。それにもかかわらず、記述の濃密さは後者の方が明らかに優っている。なぜフレデリクスバーグの戦いなのか。上述のウォレンはその理由の一つとして、フレデリクスバーグの戦いは「アイルランド人旅団」の最盛期に位置する戦闘であったことを挙げている。<sup>25)</sup> アンティータムの戦いの後、第116ペンシルヴェニア連隊と第28マサチューセッツ連隊の編入によって旅団としての体裁を整え、エスニック性も増した「アイルランド人旅団」は、この戦いで壊滅的な人的損耗を被り、以後、新兵補充の困難化を背景に旅団としての実質を失ってしまう。これを踏まえれば、フレデリクスバーグの戦いは「アイルランド人旅

<sup>23)</sup> Ibid., 337-54.

<sup>24)</sup> 例えば、William F. Fox, *Regimental Losses in the American Civil War, 1861-65* (New York: Albany Publishing Co., 1889) では、死傷者数の多寡をもって南北戦争時に召集された連隊のランク付けがなされている。

<sup>25)</sup> Warren, "Oh, God, What a Pity!," 197.

団」史のクライマックスを彩る戦闘であったと言え、著者の筆が冴えた理由が分かる。

さらにウォレンは、著者はフレデリクスバーグの戦死者を連邦に対する殉教者として描くことで、この戦いの後にコミュニティ内で沸き上がった、アイルランド系軍人は虐殺されたのだとの非難を隠蔽しようとしたのではないかと推測している。<sup>26)</sup> 確かに、前線に投入される直前にミーガーが垂れた訓示に従い、「アイルランド人旅団」所属の指標として軍帽にツゲの小枝を差し挟んだアイルランド系軍人が、メアリー高地から砲弾が雨あられと降り注がれる中、戦友たちの無惨な死をもるともせず、敵の陣地の石壁に一步でも近づこうと肅々と進軍し、次々と倒れていった場面を、幾つもの逸話によって延々と描写した件<sup>27)</sup>には神々しささえ漂っており、彼らを著者が殉教者に見立てていたとするウォレンの主張には説得力がある。おそらく著者には、軍事的には無意味としか思えない無謀な作戦だったからこそ、それを甘受したアイルランド系軍人たちの連邦への忠誠心が引き立つのだとの思いがあったのであろう。フレデリクスバーグの戦いは著者にとって、アイルランド系軍人のアメリカに対する至高の忠誠心を描く格好の舞台であったのだ。

同書においては、奴隷解放宣言が意図的に忘却されていることも指摘しておかねばならない。著者は序文の中で、「アイルランド系軍人は、黒人は奴隷のままにいる方が幸せなのか、それとも解放された方が幸せなのかを問うことはなかった。彼らは抽象的な理想のために戦ったわけではなかったからだ」<sup>28)</sup>と述べている。これは、アイルランド系軍人にとっての南北戦争が、奴隷解放のための戦争などではなかったことを言明したものであると解釈できる。奴隷解放宣言の発布と黒人連隊の召集が和平派の台頭をもたらし、コミュニティを分裂させたことは前節で述べた。序文の言葉はこの和平派の主張を封じるためのものであったと思われる。連邦政府の戦争政策への協力をめぐってコミュニティが分裂していた史実を隠蔽し、アイルランド系移民の連邦に対する忠誠心が曇り無きものであったことを示すには、奴隷解放宣言が発布されたこと自体を無視する必要があったのであろう。

同じことは徴兵暴動についても言える。「アイルランド人旅団」には多くのニューヨーク出身者がおり、徴兵暴動の勃発時に徴兵登録者の抽選の任に当たっていたのは、第69ニューヨーク連隊と関わりの深いロバート・ヌージェントであった。このことを斟酌すると、同書が徴兵暴動に全く言及していないのは、極めて不自然であり、意図的な忘却であると言わざるを得ない。第28マサチューセッツ連隊の軍旗護衛下士官ピーター・ウェルシュは妻に宛てた手紙の中で、新聞で得た情報として、暴徒は「ジェフ・デイヴィスのスパイ」であり、「リー将軍がペンシルヴェニアに侵入すると同時に蜂起する計画を立てていた」との認識を示している。<sup>29)</sup> また、「ニューヨークのアイルランド人が不名誉な暴動にあまりに数多く加わった」ので、アイルランド系移民全体が「敵に中傷し罵倒する機会

<sup>26)</sup> Ibid., 197-200.

<sup>27)</sup> Conyngham, *Irish Brigade*, 341-50.

<sup>28)</sup> Ibid., 5-6.

<sup>29)</sup> Peter Welsh to Margaret, July 17, 1863 in *Irish Green and Union Blue: The Civil War Letters of Peter Welsh, Color Sergeant, 28th Regiment, Massachusetts Volunteers*, ed. Lawrence Frederick Kohl and Margaret Cosse Richard (New York: Fordham University Press, 1986), 110.



を与えるような罫に容易くはまってしまう」のではないかとの懸念を示している。<sup>30)</sup> このウェルシュの認識や懸念は多くのアイルランド系軍人に共有されていたものと推測される。著者には、アイルランド系移民は連邦に反旗を翻したのだとの批判を招かぬよう、徴兵暴動の記憶を封印する必要があるであろう。

### 3. ウィリアム・コービー『従軍司祭生活の回想』(1894年)

『従軍司祭生活の回想』の著者コービーは、アイルランド系移民の子としてデトロイトに生まれ、二十歳の時、創立されてわずか10年のノートルダム大学に進学した。1861年末、第88ニューヨーク連隊付きの司祭として従軍し、以後三年近く「アイルランド人旅団」と行動を共にした。戦後はノートルダム大学の学長や聖十字架会のアメリカ管区総会長などの要職を歴任した。「ゲティスバーグの戦い二十五周年記念式典」に招かれたのを機に、1897年に死去するまで「アイルランド人旅団」にまつわる記憶の保持に尽力した。<sup>31)</sup>

著者が同書の執筆を始めた際には、依拠すべき従軍中の日記や書簡を残しておらず、同書の大半は彼自身の記憶を頼りにして記述された。著者の体験や見聞を超えた戦闘の全体像については、ジェームズ・モアの『反乱の全体史』からの引用で補われている。<sup>32)</sup> 出版の目的については、序文の中で「軍隊に存在した宗教的特徴を明らかにする」ことであると明言されている。著者によれば、「死を前にすると宗教は希望と強さを与えてくれる。キリスト教徒の兵士なら、自らの力が『戦い』の神に由来するのであって、人間に由来するものではないということを知っている」<sup>33)</sup> という。それゆえ、同書の主眼は、戦闘の経過や成果を述べるのではなく、軍隊における日常生活や死に直面した人間の苦悩と救いを描くことに置かれている。戦後28年以上もの時を経たとは思えないほど鮮明な記憶を基にした著者の語りは、戦争の残酷さや無常を描く件では特に冴えており、彼の言う「軍隊生活の宗教性」を際立たせる効果を上げている。

同書の本文は、著者自身の活動を回想した部分と、他の従軍司祭の事績を明らかにした部分からなっている。前者においては、従軍司祭の日常的な活動（朝のミサ、軍事行動前の特別ミサ、告解や宗教上の相談を聞くこと、軍規違反で処刑される兵士の気を休めること、負傷兵を慰問すること、兵士の家族に出す手紙を代筆することや家族からの問い合わせに応えることなど）がユーモラスな挿話を交えて軽妙に語られる一方で、戦闘場面では、銃弾飛び交う戦場を駆け巡りながら瀕死の負傷兵に悔悛の秘跡を行う著者の姿が、迫真の筆致をもって描かれている。同書は、内容のユニークさや語りの軽妙さが読者の評判を呼んだことや、著者が高名なカトリックの聖職者であったということで、「アイルランド人旅団」の記憶の保持に大いに貢献したであろうと推測される。但し、著者がアイルランド系軍人に多くの共感や理解を寄せたことは間違いの無い事実であるものの、彼自身の

<sup>30)</sup> Peter Welsh to Margaret, August 2, 1863 in Kohl and Richard, *Irish Green and Union Blue*, 115.

<sup>31)</sup> Lawrence Frederick Kohl, introduction to *Memoirs of Chaplain Life: Three Years with the Irish Brigade in the Army of the Potomac*, by William Corby (New York: Fordham University Press, 1992), xi-xx, xxiv-xxv.

<sup>32)</sup> *Ibid.*, xxii.

<sup>33)</sup> Corby, *Memoires of Chaplain Life*, 5-6.

アイルランド系としてのアイデンティティは、カトリック教徒としてのその下位に位置付けられるものであった。<sup>34)</sup> 同書が育んだ「アイルランド人旅団」の記憶は、アイルランド系軍人が有するカトリック教徒としての側面に光を当てたものであると言えよう。

同書には、カニングムが後世に残そうとした「アイルランド人旅団」の記憶を継承した部分と、著者が新たに付加した部分とがある。それが端的に表れているのはフレデリクスバーグの戦いの場面である。著者は、無謀な作戦が壊滅的な人的損耗を招くであろうことを軍人たちが予知していたという、次の逸話を挿入している。

私の部下の兵士が噂を聞きつけて、私の所にやって来て「神父様、將軍達は、敵がこの三週間邪魔されることなく設置し放題だった、あれらの大砲の前へと我々を率いるつもりです」と言った。私は「心配するな。將軍達はそんなに馬鹿じゃない」と答えた。だが驚いたことに、その哀れな兵士の言ったことは本当だったのだ。……12月13日の朝、我々は舟橋を渡った。進軍を続けている間、関の声が聞こえた。すると誰かが「これが我々の最後の関の声になるかもしれないな」と言った。<sup>35)</sup>

ウォレンによれば、著者はこの挿話によって複雑な思いの軍人たちの内面にまで踏み込み、より印象的な場面として描くことに成功しているという。<sup>36)</sup> 確かに、自らの運命を甘受した軍人たちが絶望的状况にもかかわらず最善を尽くしたとなれば、より悲劇性が増す。この場面からは、アイルランド系軍人が示した至高の忠誠心が、一種の宗教性を帯びていたことを伝えようとする著者の意図が透けて見える。彼にとってフレデリクスバーグの戦いとは、序文で述べた「死を前にすると宗教は希望と強さを与えてくれる」というメッセージの正しさを例証する格好の事例だったと言えよう。

このメッセージは、ゲティスバーグの戦い二日目の出撃を前にした全体悔悛 (general absolution) の場面で、最も感動的な形で示されている。砲弾が飛び交う緊迫した状況下、跪いて祈りを捧げる「アイルランド人旅団」の兵士たちを前に、巨岩の上に立って秘跡を行ったという著者自身の逸話はとても印象的で、のちに絵画や彫刻のモチーフとなったほどである。彼はこの全体悔悛について、次のように述べている。

この死の危機に際し、カトリック信者であるなしにかかわらず、全ての将校と兵卒が神の恩恵を望んでいた。全体悔悛は、我々の旅団のためだけではなく、今まさに裁き主の前に立とうとしている南軍を含めた全ての兵士のために、意図されたものであった。<sup>37)</sup>

ここで注目すべきは、著者がカトリックとプロテスタントあるいは北軍と南軍の分け隔てをしていないことである。この場面に限らず、同書には、著者が戦場や野営地でプロテス

<sup>34)</sup> Kohl, introduction to *Memoirs of Chaplain Life*, xx-xxiv.

<sup>35)</sup> Corby, *Memoirs of Chaplain Life*, 131.

<sup>36)</sup> Warren, "Oh, God, What a Pity!," 204.

<sup>37)</sup> Corby, *Memoirs of Chaplain Life*, 184.

タントの牧師や軍人と良好な関係（少なくとも敵対的ではない関係）を築く場面がよく出てくる。その一方で著者は、19世紀末になってもカトリックに対する理不尽な偏見や排斥が横行していると、プロテスタントの頑迷さを痛烈に批判している。<sup>38)</sup> 著者の意図は、彼が次のように述べていることから容易に推察される。

南北戦争の良き結果は、多くの偏見が取り除かれたことである。人々が共通の危険に晒された時には、彼らの間に友愛の感情が生じて、しばしば他の何よりも優れた結果へと導くキリスト信者の寛容な感情を生むからである。<sup>39)</sup>

南北戦争期、少なくとも「アイルランド人旅団」内とそれを取り巻く環境においては、カトリックとプロテスタントの間に寛容な関係が構築されていた。だが、著者が本書を執筆している19世紀末時点では、それが失われてしまった。著者はこのように示唆しているのである。この軍隊内における宗派を超えたキリスト教徒の連帯も、著者が新たに付加した「アイルランド人旅団」に関する記憶の一つであると言えよう。

#### 4. セント・クレア・A・マルホランド『反逆戦争下の第116ペンシルヴェニア連隊の歴史』(1903年)

『反逆戦争下の第116ペンシルヴェニア連隊の歴史』の著者マルホランドは、アイルランドの生まれで、7歳の時に渡米し、フィラデルフィアを生涯の根拠地とした。第116連隊に入隊して新兵の教練で活躍し、フレデリクスバーグの戦いの後はその指揮官も務めた。戦後は、かつての上司であり、民主党の大統領候補にもなったウインフィールド・S・ハンコックの引きでフィラデルフィアの要職を務める一方、1910年に死去するまで戦死者や退役軍人に対する記念・顕彰行為において多大の貢献をなした。<sup>40)</sup>

著者は、序文で次のように述べている。連邦軍に志願した軍人たちは、「ただ英雄であるだけではなく、愛国者であり、聖者であった。彼らが奉じた戦争の大義は最も神聖で、最も高貴で、最も純粹で、最善のものであった」。彼らは「自らが享受しようと希望した権利と自由を、敵に対してさえも留保し保障するために戦ったのである」。「私が記録しようとしているのは、これらの軍人たちによって構成された勇敢な連隊の歴史である」。その連隊の記録には「いささかの汚点も欠点も無い」。この書を書いたのは「戦友たちが達成した偉業の記憶が忘却されることのないように」することが戦友への義務だと感じたからである。<sup>41)</sup> これらの言葉からは、同書が戦友たちの偉業を称える記念碑として企画されたものであることが分かる。戦死者や退役軍人に対する記念・顕彰行為はマルホランドの後半生のライフワークの一つになったものである。講演や記念碑の建立に加え、名誉勲章

<sup>38)</sup> Ibid., 66-70.

<sup>39)</sup> Ibid., 185-86.

<sup>40)</sup> Lawrence Frederick Kohl, "Introduction: St. Clair Mulholland and the Civil War," to *The Story of the 116th Regiment Pennsylvania Volunteers in the War of the Rebellion*, by St. Clair A. Mulholland (New York: Fordham University Press, 1996), ix-x, xiii-xviii, xxi-xxiii.

<sup>41)</sup> Mulholland, *Story of the 116th Regiment*, iv-vii.

の申請や歴史叙述などがその主な活動であった。立体幻灯機を使ったスライドショーの場で磨かれた話術を駆使した彼の講演は評判が良かったという。<sup>42)</sup> 同書のドラマティックな語り口には、この弁士としての経験が反映されているものと思われる。

タイトルには「第 116 ペンシルヴェニア連隊の歴史」とあるが、内容は「アイルランド人旅団」の軍事行動において第 116 連隊が果たした役割を追ったもので、同書はカニンガム以来の「アイルランド人旅団」にまつわる歴史叙述の系譜に位置づけられる書である。ハーパーズ・フェリーで同連隊が正式に「アイルランド人旅団」に編入された場面から始まり、1889 年にその記念碑が建立されたのを機に最後の「召集」がなされた場面で終わっている。ゲティスバーグの戦いは 43 頁にわたって詳述されており、この場面が同書のクライマックスであることが分かる。アイルランド系軍人が連邦に示した至高の忠誠心に対する讃辞、ミーガーの擁護、奴隷解放宣言と徴兵暴動の忘却など、カニンガムが後世に残そうとした「アイルランド人旅団」の記憶を同書が継承していることを指摘するのは容易である。また、カニンガムやコービーの書と同じく、フレデリクスバーグの戦いに関する叙述が充実しており、ゲティスバーグの戦いに次ぐ扱いとなっていることから、同書がカニンガムの書の影響下にあることが分かる。例えば、著者は出陣の直前にミーガーが兵士たちに檄を飛ばす場面を次のように描写する。

トマス・F・ミーガー將軍は馬に乗り、將校たちを従えて、アイルランド人旅団の個々の連隊を回って訓示を垂れていた。……緑のツゲが近くの庭で摘み集められ、ミーガーは一本の小枝を軍帽に挿した。將校も兵卒も全員がこれに倣い、ほどなくして、相当な量であった灌木の束が全ての兵士の軍帽に飾られた。リースが作られ、ずたずたに裂かれた軍旗に掛けられた。エメラルド島の国の色は、赤・白・青の共和国の色と見事に調和し溶け合った。<sup>43)</sup>

絵画的で印象的な場面である。カニンガムの多用した星条旗と連隊旗が並立するイメージが洗練され、ここではアイルランドを象徴する緑がアメリカを象徴する赤・白・青と「見事に調和し溶け合った」という描写に発展している。このあとの場面で著者はコービーに倣い、戦闘開始前に兵士たちは勝利の可能性が皆無だということを知っていたと述べ、彼らの戦いぶりを次のように描写する。

成功の希望が無いということが分かっている時に、敵を攻撃したり戦闘に入ったりするには、希望から生まれる熱狂によって軍人が支えられている時よりも、ずっと高度な勇気が必要になる。ひとたび指揮官が部下に「突撃し死せよ！」との命令を出すや、軍人たちは「了解。將軍殿！」との返事で応じたと記録されている。……全ての階級の兵士がこれは戦いではなく、死だということを知っていた。<sup>44)</sup>

<sup>42)</sup> Kohl, introduction to *Story of the 116th Regiment*, xviii.

<sup>43)</sup> Mulholland, *Story of the 116th Regiment*, 43-44.

<sup>44)</sup> *Ibid.*, 44.



兵卒たちは落ち着いており、無言で、晴れやかな顔つきをしていた。穏やかで抑制された口調でなされた将校たちの命令を聞き逃すことなく、粛々と遂行した。……混乱と興奮の欠如は猛烈な恐怖を一層増幅させた。……他の国の兵士なら、叫び声やわめき声を思う存分出すかもしれない。だが、1861年の戦争の兵士たちは、不平不満を口にすることなく自らの死を受け入れた。<sup>45)</sup>

戦場を支配する奇妙な静寂と底知れぬ恐怖を描くことで、死を覚悟した軍人たちの気高さを浮き彫りにしている場面である。ここで注目すべきは、「1861年の戦争の軍人たち」という表現が使われていることである。ウォレンは、これを「生まれながらのアメリカ人か移民か、北部出身か南部出身かを問わず全てのアメリカ人」だと解釈している<sup>46)</sup>が、次の件を読むと、「1861年の戦争の軍人たち」が意味するものは、直接的にはアメリカのみならず世界各地から馳せ参じ、連邦護持の大義に殉じた北軍の軍人たちであることが分かる。

これらの死傷者たちは何と国際色豊かな連中であつたことか！ 大西洋岸や太平洋岸の諸州、さらには大草原やミシシッピー川とオハイオ川の大渓谷からやって来たアメリカ人、シャノン川地方からやって来たアイルランド人やライン川地方からやって来たドイツ人、セーヌ川地方からやって来たフランス人、ティベル川地方からやって来たイタリア人、これらの人々が血を混ざらせ、大義のために連邦護持のために、一緒に死んでいったのだ。<sup>47)</sup>

だが、次の挿話からは、著者が南軍もまた、その武勇に対して敬意を払うに値する高貴な存在として描こうとしていることが分かる。

弾丸が掃射される平原を横切って果敢に攻撃をしかけ、やせ細っていく戦列の兵士たちの勇気たるや相当なものであつたが、それに対峙している軍人たちも同じくらい豪胆で頑強な者たちであつた。急拵えの石の胸壁の背後にいた者たちは「彼らと同じ骨を持ち、同じ肉を持つ」者たちだつた。……その戦闘の朝、ミーガー將軍は麾下の者たちに常緑樹の小枝で軍帽を飾るよう命じた。「敵の軍人たちに彼らの生国を思い出させるために」と彼は言った。そのしるしは同郷の者たちに認識され、「おお、何たることか！ ミーガー率いる同志たちがやって来る」との声が南部連合の軍人たちの間から上がった。<sup>48)</sup>

ここでは同胞殺しの悲劇に直面しながらも、武勇の誉れを示そうと最善を尽くす南軍のアイルランド系軍人たちの高貴さが強調されている。このことを斟酌すれば、上のウォレ

---

<sup>45)</sup> Ibid., 46.

<sup>46)</sup> Warren, "Oh, God, What a Pity!," 208.

<sup>47)</sup> Mulholland, *Story of the 116th Regiment*, 51.

<sup>48)</sup> Ibid., 56-57.

ンの解釈は、必ずしも外的外れではないことが分かる。著者は、フレデリクスバーグの市街地からメアリー高地に至る戦場を、出身や所属を問わない全ての軍人たちが高貴な武勇を競い合う場として描こうとしていると考えられるからである。

同じことがゲティスバーグの戦いを描いた場面についても当てはまる。三日間の激戦におけるペンシルヴェニア出身の軍人たちの武勇を称揚し、第116連隊の動静と活躍を詳細に綴った後、著者は「ゲティスバーグについての注解」と題した件に筆を進める。肉弾戦の凄惨さを伝える逸話を幾つか挙げ、「ゲティスバーグにおける両軍の戦闘は激烈であったため、両軍の兵員と組織の戦闘能力を真に理解して適切に評価するには、戦傷による人的損耗率を冷徹に算定し、他の戦争や他国の軍隊による同様の結果と比較せねばならない」<sup>49)</sup>と述べた上で、北軍の部隊の死傷率（数）を連隊毎に、指揮官の奮闘ぶりや対戦した南軍の攻撃の凄まじさを伝える逸話と共に延々と列挙している。南軍の人的損耗と対比させながら、各連隊の死傷率（数）を淡々と列挙していく著者の筆遣いには凄みすら感じられ、この件はアメリカの再生のために殉教した全ての軍人に捧げられたオマージュではなかったかとの印象を受ける。<sup>50)</sup>

以上の議論を踏まえれば、フレデリクスバーグやゲティスバーグの戦場は、著者にとって、生まれながらのアメリカ人と移民とが連帯し、アメリカの再生のために死力を尽くした場であったと言える。

## 結

世紀転換期に書かれたコービーとマルホランドの回想録は、カニンガムが後世に残そうとした「アイルランド人旅団」にまつわる記憶の枠組みを継承する一方、コービーは宗派を超えたキリスト教徒の連帯を、マルホランドは生まれながらのアメリカ人と移民との連帯の記憶を新たに付加した。その背景には、当時のアイルランド系移民を取り巻く社会状況が関係していると考えられる。1880年代後半以降、かつては死闘を演じた南北両セクションの和解は急速に進展したが、生まれながらのアメリカ人とアイルランド系移民との間には依然として敵対感情が残っていた。新移民の大量流入に伴ってネイティブイズムが再燃する一方<sup>51)</sup>、カトリック教会内では自由主義派（「アメリカ化主義者」）<sup>52)</sup>が凋落して

<sup>49)</sup> Ibid., 137.

<sup>50)</sup> 注の2で言及したブライトの議論を踏まえれば、この件や前段で引いた件からは、移民が南北の兄弟愛の生成に果たした役割を強調しようとする著者の意図が読み取れよう。

<sup>51)</sup> 例えば、1893年の不況の際、カトリック勢力の撃退をスローガンに掲げたアメリカ保護協会は全米各地で急速に勢力を伸ばし、1894年前半期には会員数50万人を誇るに至った。John Higham, *Strangers in the Land: Patterns of American Nativism 1860-1925* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1983), 81-87.

<sup>52)</sup> ジェームズ・ギボンズやジョン・アイルランドに主導された一派で、その影響力は1880年代から90年代初頭にかけて、アメリカの教会の多くに及んだ。金びか時代に横行した経済的特権や政治的腐敗を批判しながらも、アメリカの資本主義や民主主義は擁護し、謙遜・服従・宿命論的諦観といったカトリック的価値よりも、勤勉・独立独行・儉約・禁酒といったアメリカ的価値に重きを置いた。プロテスタントや平信徒会との対話を好み、カトリック信仰や民族性の違いを理由とした孤立に反対した。Miller, *Emigrants and Exiles*, 528-29; Kenny, *American Irish*, 165.

保守主義が復権した。コービーにはこの趨勢に抗し、宗教的寛容を喚起しようとの意図があったものと思われる。マルホランドの場合には、ネイティヴィズムの高まりに抗してアメリカにおける移民の役割を弁護しようとの意図があったものと思われる。なぜなら彼には、南北戦争中のアイルランド系軍人には脱走した者が多かったというネイティヴィストの批判に対し、アイルランド系軍人とドイツ系軍人の損耗人員リストを引用して、移民の忠誠や勇気の欠如を伺わせるものは何もないと主張した文章を新聞に寄せて反論した過去があるからである。<sup>53)</sup> 彼が生まれながらのアメリカ人と移民との連帯の記憶を付加したのは、南北戦争の記憶を用いてネイティヴィストに反駁するという戦術の応用であったと言える。マルホランドにとっての南北戦争の記憶は、老いた退役軍人が与えてくれる「豊かな郷愁」などといったのどかなものではなく、アイルランド系移民のアメリカ人化とも関わるもっと切実なものだったのである。

---

<sup>53)</sup> Randall M. Miller, "Catholic Religion, Irish Ethnicity, and the Civil War," in *Religion and the American Civil War*, ed. Harry S. Stout and Charles Reagan Wilson (New York: Oxford University Press, 1998), 284-85.